

ウルドゥー文学前史——南インドのウルドゥー語文献——

北田 信*

Urdu Literature in Deccan from the 14th to 17th Century

KITADA Makoto

The Kyoto University Aqeel Collection possesses about 400 books on Dakanī Urdu literature besides more than 200 books on the local history of the Deccan. Books on these topics are becoming scarce even in India in recent years. Such a big collection is very rare worldwide. This article aims to make the significance of this collection clear, in that the situation of the Deccan in the history of Urdu literature is clarified. First, the history of Muslim immigration from North India to the Deccan, which is the background of the emergence of Dakanī Urdu, is surveyed. Next, three Dakanī Urdu works from the Bahmanī and Quṭb Shāhī dynasties which were renowned for their respective prosperity in literal activities, are presented and analyzed: the Kadam Rāo Padam Rāo or the oldest narrative poetry (maṣnavī) by Nizām Fakhar Dīn (Middle 15th cent.), Qulī Quṭb Shāh's love poetry (16th cent.), and the Sabras, or the masterpiece of Dakanī Urdu narrative prose by Vajhī (17th cent.).

【前書】

京大所蔵アキール文庫にはダカニー・ウルドゥー語文学関連文献が400冊程度収蔵されており、さらにデカン地方史に関連する文献も200冊以上がある。デカンおよびダカニー・ウルドゥー語文学に関する書籍は、インドですら入手困難になりつつあり、これほど大量のコレクションは世界的にも珍しい。本論文は、ウルドゥー語文学史におけるデカンの位置を観ることにより、京大所蔵アキール文庫の意義を明らかにしようとするものである。

1. ウルドゥー語文学の歴史

ウルドゥー語文学の歴史には屈折がある。ウルドゥー語誕生の地は北インド(デリー)である。一説によると、ウルドゥー語はデリーの城下町で、デリーの民衆語(ヒンダヴィー)を土台にして、それに外来のムスリムが持ち込んだアラブ・ペルシア・トルコ語彙を取りこんで誕生した、と言われる。しかしながら、ウルドゥー語の誕生したデリーでは、もっぱらペルシア語による創作が行われ、ウルドゥー語による創作が始まるのは18世紀をまたなければならない。

ウルドゥー文学揺籃の地は、北インドではなく、むしろ周縁に位置するグジャラートやデカンである。特にデカンにおいては既にバフマニー朝(西暦1347-1526)時代より、デカンで話されるウルドゥー語の一方言である“ダカニー・ウルドゥー”語を用いた文学伝統が始まっていた。デカン文学の発展は、デカンのゴールコンダ(Golkundah)やハイダラーバードを首都としたクトゥブ・シャーヒー朝(Quṭb Shāhī 西暦1518-1687)、そしてビージャーブル(Bījāpur)を首都としたアーディル・シャーヒー朝(‘Ādil Shāhī 西暦1489-1686)に受け継がれ、ダカニー・ウルドゥー語を用いて多数の珠玉の文学作品が著された。

デカンでダカニー・ウルドゥー語による創作が盛んに行われていたのと対照的に、ムガル朝下の

* 大阪大学 言語文化研究科 准教授

北インドでは創作はペルシア語で行われ、ウルドゥー語は民衆の話し言葉としての位置に甘んじていた[松村 2008: 27]。

デカンのムスリム王朝下で大きな発展を遂げたダカニー・ウルドゥー文学は、詩人ワリー (Vali 1707 年頃没) の登場によって頂点に達する。ワリーのガザルがデリーで人気を博し、それまでペルシア詩中心であったデリー詩壇に大きな影響を与え、18 世紀になるとデリーの詩人たちがウルドゥー語で詩作を始めるようになる[松村 2008: 27]。

今日、我々がウルドゥー語の古典文学として学ぶものはワリー以降、つまりムガル朝衰退期に著された作品群であるが、上に見たようにデカンにはそれに先立つ約 300 年の長い文学伝統があった。ワリーからガーリブまでのウルドゥー古典文学の輝かしい業績、さらに近現代におけるウルドゥー語の旺盛な文芸活動は、デカンの地の文芸伝統の長年の蓄積なくしては生まれ得なかったものなのである。しかし残念なことにダカニー・ウルドゥー語による作品は、今日では等閑に付され、ウルドゥー文学史の教科書で幾つかの代表的作品が紹介される以外は、ほとんど読まれなくなってしまっている。

2. デカンの歴史とダカニー・ウルドゥー語の成立

“ダカニー・ウルドゥー”語とは“南のウルドゥー語”あるいは“デカン地方のウルドゥー語”という意味である。今日でも、デカンでは、有力なマラーティー語やドラヴィダ系の言語と並んで、ウルドゥー語話者が多く、例えばアーンドラ・プラデーシュ州の首都ハイダラーバードのウルドゥー話者の人口は 1,222,357 人 (1991 年) で、デリーの 512,990 人を遥かに上回る¹⁾。ダカニー・ウルドゥー語は北インドで話される標準的なウルドゥー語に似ているが、幾つかの文法的相違点²⁾があり、さらに多くの独特の語彙を持つ。デカンの北インドで生まれたウルドゥー語が、どのような経緯で南に持ちこまれ、ダカニー・ウルドゥー語として独自の発展を遂げたのかを、簡単に見て行く。筆者は歴史学の専門家ではないので、以下に述べる事柄は多くの専門家にとっては特に目新しい情報を供与するものではないことを断っておく。しかしながら、デカンの歴史的背景を踏まえておくことは、ダカニー・ウルドゥー語文学の性格を捉えるのに役立つであろう。

- ① 1193 年にクトゥブッディーン・アイバクがデリーを占領し、デリーに多数の外来の民族が移り住むようになると、外来の人々が話すペルシア語・トルコ語と、デリーでもともと話されていた南アジア土着の言語 (新期インド・アーリア語) が混ざり合って、ウルドゥー語の元となる言語が誕生する。“ウルドゥー”という言語名称は当時まだ生まれておらず、人々はこの言語を漠然とヒンダヴィー (“インドの言語”) と呼んだ。
- ② こうして、まず、北インドのデリーがムスリム勢力の拠点とされると、デリーのムスリム征服者たちは盛んに南方に遠征を行うようになった [Luther 1998: 3f]。その結果、西暦 1294 年にはアラウッディーン・ハルジーが南の有力なヒンドゥー王国デーオギリ (今日のダウラターバード) を属国とする。彼はさらに 1308 年にワランガルのヒンドゥー王国をデリー政権の州として併合する。
- ③ 1325 年にはムハンマド・トゥグルクがデリーで即位をし、トゥグルク朝を建てる。1327 年にはデリーからデーオギリに遷都し、これをダウラターバードと改名する。つまり、自らの政治の拠点そのものを南に移してしまうのである。

1) Osada & Onishi 2010, p.42f. もちろん、ウルドゥー語を使用しているも、ヒンディー語として申告する場合や、その逆など、さまざまな問題があり、ここに挙げた話者人口はあくまで目安としてのものである。

2) 例えば、ダカニー・ウルドゥーは能格構文を持たず、他動詞の完了分詞は行為者名詞の性数に一致する。

- ④ ところが1346年に、トゥグルクの圧政に反発したデカンの貴族達がイスマールをスルターンとして反乱をおこし、トゥグルクから分離する。さらにデカンの貴族達の間には仲間割れが起こり1347年にザファルがイスマールを退位させ、みずから王位につき、アラウッディーン・ハサン・バフマン・シャーと名のる。これが、デカンの最初のムスリム王朝であるバフマニー王朝の始まりである。
- ⑤ 北インドからのデカンの独立性は、ムガル皇帝アウラングゼーブが西暦1686年にビージャール王国を、西暦1687年にゴールコンダ王国を征服・属国化するまで保たれ、デカンには北インドとは異なる文化が開花した。

アラウッディーン・ハルジーとムハンマド・トゥグルクが盛んに南方に遠征軍を送った時代に、北インドのウルドゥー語を母語とする人々が大量に南方のデカン(たとえばデーオギリ)に移住した。この地域ではもともと様々な言語が話されていた。新期インド・アーリア語のマラーティーヤグジャラーティー、ドラヴィダ語族のテルグー語やカンナダ語である。マラーティーヤグジャラーティー語はウルドゥー語と同じ新期インド・アーリア語に属し、ウルドゥー語に近い関係にあったため、ウルドゥー語に強く影響し、結果として、デカン特有のウルドゥー語の方言が出来上がった。これをダカニー・ウルドゥーあるいはダキニー・ウルドゥー(“デカンのウルドゥー”)と呼んでいる[Luther 1998: 27f]。

デカンはヴィンディヤ山脈とナルマダー川で北インドから切断されており、そのため、デリーの影響の薄いところで、独自の文化を育むことができた。また、上に見たように、北インドの政権から分離独立して自らの主権をうち立てたデカンの支配者達は、北インドからの独立性・独自性を強調する必要があった。そこで、デカンの地方語による地方色が濃く個性豊かな文芸・芸術を盛んに奨励振興した。このことも、デカンでペルシア語だけでなくダカニー・ウルドゥー語による文芸が栄えたことの大きな理由であると考えられる。

また、デカンにイスラームを広めようとしたスーフィーたちは、現地の民衆に分かる言語(ダカニー・ウルドゥー)を用いて布教を行った。その際、ヒンドゥー教徒の間に伝わる土着的な神話伝説を、イスラームの信仰や教義を説明するための喩え話として利用した。これがダカニー・ウルドゥー語による文芸活動の発生の契機となったと考えられる。

こうした背景のもとに生まれてきたダカニー・ウルドゥー語文学作品は、ペルシア語文学に比べて、より民衆に近く、作者の個性をはっきりと打ち出していた。北インドからの差異を強調する必要ゆえに、民衆的であることや個性的であることが肯定的な意義を持ったのである。

3. ダカニー・ウルドゥー文学の実例

上に述べたことがらを、ダカニー・ウルドゥー文学の実例を見ながら、観察してみることにしよう。

【ニザーム・ファハル・ディーン作『カダムラーオ・パダムラーオ』】

(Nizām Fakḥar Dīn, Kadam Rāo Padam Rāo)

ダカニー・ウルドゥー語による最初のマスナヴィーである。著者ニザームは、バフマニー朝時代の詩人である。生年没年については諸説紛々としてよく分からないが、この作品は15世紀中頃に著されたと推定される。北インドに生まれた言語がデカンに到達してから約一と四半世紀が経った頃であり、ダカニー・ウルドゥー語がまだ粗削りだった段階にあたる[Kāshmirī 2009: 80ff]。

言語(文法・語彙)、物語の粗筋の両面において、インド土着の文化、つまりヒンドゥー的な色彩の強い作品である。言語があまりにも難解であるため、完全な解読はなされていないが、現時点で分かっている粗筋は次のようなものである。

あらすじ

ヒーラーナガル国の王カダムラーオと蛇の王バダムラーオの物語である。蛇の王バダムラーオは、王カダムラーオの大臣となっている。

大臣バダムラーオは雌蛇と共謀して、王カダムラーオを殺そうとする。雌蛇が王の寝室に忍び込み、王を殺す隙をうかがっていると、王妃が寝室に入って来る。王は目覚め、蛇に気付いて刀で打つが、蛇は自ら尻尾を切って逃げる。王は王妃に疑いの目を向け、女性不信の言葉を投げかける。王妃は、自分は無実であることを訴えるが、その甲斐もなく、王は怒りを解こうとしない。[写本の断絶によりこれに続く部分との脈絡は不明]

カダムラーオ王は大臣バダムラーオを真の友として褒めそやす。大臣バダムラーオは、王の信頼の証として、額に麝香を塗ってもらう。

カダムラーオ王は、大臣バダムラーオに、「サーサーンの王たちやジャムシェード王のように、自分の宮廷にも外国人の臣下が欲しい」と相談する。大臣バダムラーオは、「外国のヨーガ行者の類いは、酒と肉をくらってばかりで信用がならない、おやめなさい」と諫めるが、王は耳を貸そうとしない。そこで、ヨーガ行者マツチャンダル(Matsyendra)の息子アゴールナート(Aghoranātha)が宮廷に招かれる。アゴールナートは鉄を金に変えたり、弓術(Dhanurveda)をたった一カ月で王に伝授したり、さまざまな手管で王の心を掴んでしまう。

ある日アゴールナートは王に、「陛下に不死の術(Amaraveda)を伝授して進ぜましょう」と持ちかける。彼は、不死の術に必要なと言って、一羽の鸚鵡を持ってこさせ、王に鸚鵡の頸を絞めて殺すように言う。王がその通りにすると、アゴールナートは、自分の魂を鸚鵡の身体に吹き込み、鸚鵡の身体を操って飛びまわったりしゃべったりして見せる。王はすっかり心を奪われてしまい、自分もこの術を習得したい、と願う。

宮廷の賢者たちは、錬金術師アゴールナートに対する王の執心ぶりを見て、不安がって諫めるが、王は不死の術の習得に耽る。

ある日、アゴールナートは王に、「私が伝授した不死の術を実際に使ってみてください」と指図する。言われたとおりに王が鸚鵡の身体に入ると、後に残った魂の抜けた王の身体に、アゴールナートが入り込んでしまう。こうしてアゴールナートは王の身体を操って、王国を乗っ取るようとする。

鸚鵡となった王は、あちこち飛びまわって、ついに大臣バダムラーオの宮殿にたどりつく。鸚鵡(王)は大臣バダムラーオのところに行き、「鳥の姿であるが自分が実は王なのだ」と打ち明ける。

大臣バダムラーオ(蛇)は、眠っている偽の王(アゴールナート)のところに行くと、王の足の指に噛みつく。蛇の毒が身体に回った苦しさに耐えかね、アゴールナートの魂は王の身体を抜け出して逃げる。大臣バダムラーオは鸚鵡(王)を呼び寄せる。再び不死の術を使うことにより、王の魂は鸚鵡の身体を抜け出し、自分の身体の中に戻る。元通りの身体に戻った王カダムラーオは、大臣バダムラーオに褒美をやり、国民は王の帰還を祝って祭りを催し、王はふたたび王座に就く。

『カダムラーオ・パダムラーオ』は民衆文学的な性格の強い作品であるといえ、インドの土着的な御伽話の体裁を取る。ヒンドゥーの民間信仰に所縁のある蛇の精(ナーガ)が登場し、また、ヨーガの修行によって超常の力を獲得した妖術師が魔術を駆使して世界を征服しようとする。王の心を惑わすのは、女性の魅力が創出する幻術や、錬金術師の伝える変身の術である。

テキストにはインド民衆に膾炙する表現が散りばめられる。たとえば「道に落ちている縄を蛇と勘違いする」という表現は、古代のインド哲学者が、現世は幻覚にすぎないことを言うために引き合いに出した喩えである。「煮立った牛乳を飲んで舌を火傷した者は、冷たいサワー・ミルクさえもフウフウと吹いて冷ましながらか飲む」という表現は、今日でも新期インド・アリア語の諸言語で日常的に用いられる諺である。

【クリー・クトゥブ王の抒情詩】

デカンでは民衆を相手にした布教文学だけでなく、為政者たちもダカニー・ウルドゥー語を用いて詩作を行った。

クリー・クトゥブ・シャー (Muhammad Qulī Qutb Shāh AD1580–1612) はゴールコンダを都とするクトゥブ・シャーヒー王朝の五代目の王である。現代でも中央インドの政治経済の中核として機能する都市ハイダラーバードを建設した。チャール・ミーナール(四本の尖塔を持つ宮殿)を始めとする数々のすぐれた建築物を造営させた。政治家として領土拡大を旺盛に行っただけでなく、詩人としても優れ、享樂的かつ官能的な内容の抒情詩の中で私生活を包み隠さずに表現した。ヒンドゥーの踊り子バグマティーとの伝説的な恋物語は、細密画のモチーフともなっている。

たとえば、次のような、後宮の肌の浅黒い美女を歌った作品がある³⁾。

1. mērī sānwālī man kī pyārī dīsē / ke rang rūp meñ kūnwālī nārī dīsē

私の黒い女、心に愛しき女が現れる 容色において柔和な女性が現れる

2. saḥē sab saḥēliyān mēñ bālī aḥab / sar o qad nārī avtārī dīsē

すべての女達の中で、頭(=背の高さ)と体の点で、この女が殊勝に見える

3. sakiyān mēñ ḍolē neh bāzī sōñ jab / ūmukh jōt thē cand kī khwārī dīsē

女友達の中を 愛情の遊戯によって(=愛嬌をふりまきながら)身体を揺らめかすとき
上向きに放射される輝きによって月に対する卑しめのように見える

4. tū sab mēñ uttam nārī tuj sam nahīn / kōil tērī bōlān thē hārī dīsē

そなたはすべてのうちで最も優れた女性だ そなたに匹敵する者はない
コーイル鳥さえもが、君の言葉により敗北者のように見える

5. tērī cāl nekī sab hī man kō bhāē / sakiyān mēñ tūñ jōñ phul bahārī dīsē

君の足取りはすべての[人の]心に好ましい 女友達に囲まれて君は春の花のように見える

6. bahūt rang sōñ āp rangiyān sakiyān / valē kāñ tirē rang kī nārī dīsē

多くの色彩により(=色とりどりの装いにより)女友達は自らが彩り豊か(=あでやか)。
しかし、君の[ような]容色の女性はどこに見えるだろうか? [いや、見えない]

7. nabī sadqē qutbā pyārī sadā / saḥēliyān mēñ zēbāī tumārī dīsē

預言者(nabī)に身を捧げます(sadqah, ṣadaqah)。クトゥブよ!常に
女達のうちで、お前の可愛い女が[一番]美しく見えるぞ。

[Ja'far 1998: 417]

3) この時代のダカニー・ウルドゥー語の発音については不明な点があり、また、訳文についても議論の余地がある。ここに載せた発音・訳文は暫定的なものである。

アラビア文字で表記されているにもかかわらず、この詩においてはアラブ・ペルシア語彙はほとんど用いられず、インド土着の抒情詩伝統に属する語彙と修辞法が使われる。

たとえば第3連はインド土着の比喩を下敷きにしている。サンスクリットやブラークリットなどインド土着の古典抒情詩において、美人の顔は月に喩えられる。美人の顔は満月のようであり、非の打ちどころがない。これに対し、実際の月には斑点があり、しかも欠けることがある。美人の容貌の完璧さの前に、月自身が色を失って恥じ入る。サンスクリット古典抒情詩においてよく用いられる修辞である。

第4連に言及されるコーイル鳥 (koil) は、春に啼く声の甘美なる鳥であり、インド土着の古典抒情詩において、サンスクリット語 *kokila*、ブラークリット語 (中期インド・アーリア語) *koila* という語形で登場する。ここでも、土着の抒情詩にきわめて頻繁に登場する誇張的修辞が用いられている。つまり、美女の声があまりにも甘美なので、コーイル鳥さえもが、自らの声を恥ずかしく思う。

語彙の面でも、インド土着の抒情詩の伝統的な語彙が顕著である。たとえば第1連の“黒い”と訳した語彙 *sānwī* はサンスクリット語の *śyāmala-*、ブラークリット語形 *sāmala-* に由来し、漆黒というよりもむしろ深い群青色、一見黒にみえるが、良く見ると、青、緑、こげ茶の混ざり合ったような、日差しの加減によって微妙に移り変わっていく色彩、つまり、南アジア人特有の肌の色を指す単語である。その微妙な移ろいの様が“柔和” *kūnwī* (梵 *komala-*) であるというのである。また、たとえば第3連の“愛情” *nēh* はサンスクリット語彙 *sneha* に由来し、心が濡れてしっとりとなるような愛情を意味する。ここでは全てを指摘しないが、この他にもインド土着の詩的語彙が多く含まれている。

為政者クリー・クトゥップ・シャーの作ったこの詩は、サンスクリット・ブラークリット古典詩からアパブランシャ語、さらに新期インド・アーリア語へと受け継がれていくインド土着の抒情詩の伝統を踏襲しており、インド土着の抒情詩の文脈で見れば、語彙・内容の点で、それほど特異なものとは言えない。クリー王は、中央アジアのトルコ系という出自にもかかわらず、デカンの土着の歌舞音曲をこよなく愛し、自らも楽器を奏で、デカンの女たちとともに歌い、戯れた。

しかし、これが、ムスリム文学の文脈の中に投げ入れられ、アラビア文字で表記され、この詩の末尾 (第7連) にある「預言者 (*nabī*) に身を捧げます (*sadqah, sadaqah*)」という、いささか言い訳めいた宗教的な根拠づけが付け加えられる。つまり、インド土着の抒情詩が、ムスリム的な枠組みの中にそっくりそのまま嵌め込まれる。その瞬間、それまで何の変哲もなかった土着的な恋愛詩が、異教的な雰囲気、禁断の悦楽の芳香を身に纏って不思議な魅力を放ち始める。

デカン文学の個性とはつまり、デカン古来のインド土着的な文化要素をムスリム的な枠組みに組み込んで見立てなおす、つまり同じ対象であっても、それが投げ込まれる文脈に応じて、全く異なる機能を果たすようになる、という化学変化にも似た現象の産物であると言える。

【ワジュヒー作『全ての味わい (サブ・ラス)』】

詩人ワジュヒー⁴⁾は享楽王クリー・クトゥップ・シャーの親友であり、享楽を詩に詠んだ。ここでは、彼が著した散文作品『全ての味わい』を取り上げる。これは、ダカニー・ウルドゥー最初の散文作品である。

ワジュヒーの生涯については、ゴールコンダの王イブラーヒーム・クトゥップ・シャー (*Ibrāhīm Qutb Shāh AD1550–1580*) の時代に生まれたということ以外、よくわかっていない。続く享楽王ムハ

4) ワジュヒーの生涯と作品については *Kāshmirī* 2009, p. 167ff を参照せよ。

ムハマド・クリー・クトゥブ・シャー (Muhammad Qulī Qutb Shāh AD1580–1612) とそれに続く王たちの時代にダカニー・ウルドゥー語およびペルシア語の詩人として活躍した。庇護者クリー・クトゥブ・シャーと趣向を同じくし、飲酒・自由奔放・愛を詩に詠んだ。代表作はマスナヴィー『クトゥブ・ムシュタリー』(Qutb-e-Mushtari) と『全ての味わい(サブ・ラス)』である。没年は西暦1656–1671年の頃といわれる。

物語詩『クトゥブ・ムシュタリー』は皇子時代のクリー・クトゥブ・シャーを主人公に見立て、彼と天女ムシュタリーとの愛を扱った。

ダカニー・ウルドゥー語の最初期の文学的散文『全ての味わい(サブ・ラス)』は、詩人の良き理解者・享楽王クリー・クトゥブ・シャーが没し、詩人が長い失意の年月を忍んだ後、やっと光が見えてきた頃、すなわち西暦1635–1634年に、その時の庇護者アッラー・クトゥブ・シャー王(治世1626–1672)の治世10年を記念して書かれた。

題名『全ての味わい(sab ras)』の“味わい”rasとは、サンスクリット古典美学理論の核心的概念ラサrasa(味わい、ジュース、美的陶酔)のことである。ラサは、一方では精妙な美学理論として発展しながら、一方では、今日も日常会話で用いられる概念であり、日常的には物事に漲る味わい、エッセンス、エネルギーや雰囲気の意味する。南アジア文化の中心的なキーワード・ラサ、そのラサ全体を含む書物、ギュッと搾ればあらゆるラサ(味わい)が染み出してくるようなジューシーな果実の如き書物、というのである。

『全ての味わい』は冒険風の御伽話である。登場人物の名前はすべて寓意的であり、スイースターン国⁵⁾の王“理性”(‘Aql)の王子“心”(Dil)は、不老不死の霊水“生命の水”(āb-e-ḥayāt)を求めて旅に出る。生命の水の湧き出る泉は“顕現”(Didār)⁶⁾の都の庭園に存在するという。“心”王子が数々の冒険を経て“顕現”の都に至ると、“顕現”の都の王“愛”(‘Ishq)の皇女“美”(Ḥusn)に出会い、一目惚れしてしまう。“心”王子と“愛”皇女の恋の成就、さらに生命の水の獲得までの道のりを描く。イスラーム世界に広く伝わる生命の水と、それを守る賢者ヒズル(Khizr)の伝説をもとにしている。一説には、ペルシア語詩人ファッターヒー・ニーシャープリー作品『美と心』(Ḥusn o dil)を下敷きをしているという。

この、ダカニー・ウルドゥー語による初期の散文作品の、たたみかける様な語り口は、おそらく話し言葉の調子を模倣したものであらうと思われ、まるで辻説教師が、道を行き交う民衆を前にして、大声を張り上げている様が彷彿とされる。

もしひとに弁論の知識と奥義の知があるならば、この本は天上の宝であり、意味の海である。ひとが自然の扉を開けば開くほど、この本に書かれていないことは何があると言えようか。天空と大地の中にあるものは何でもこの本の中にある。世俗と宗教の中にあるものは何でもこの本の中にある。どれほど雄弁なものであっても、いまだかつてこれほどの雄弁さで語らなかった。このように話に流暢さを与えなかった。いかなる人間の仕業でもなく、いかなる無知なる者の仕業でもない。秘密を知る者が、この本を理解するだろう。この本は全くの驚異である。もし宗教と世俗の望みを得ることを望むなら、この本を見よ。もし偉くなって世を教え導こうとするなら、この本を見よ。賢者(sudhīn)たち、指導者がいる。ムスリムたちには指導者(ピールとムルシド)がおり、ヒンドゥー教徒たちには放浪の成就者(jangam sid)たちがいるだろう。

5) Sīstān ペルシアの東に位置する国

6) ペルシア語彙 *didār* には「見ること」「会うこと」「(恋人)が姿を現すこと」などの意味がある。

我々ヒンドゥーはお前から話を聴いて、お前を認めるだろう。我々ムスリムはお前を偉い奴だと知るだろう。たったひとつ、言葉 (kalimah) の違いがあるだけで、残りは神の唯一性の中にヒンドゥーもムスリムも溶け込んでいる。もし神を理解し、彼に信仰が生じるならば、ヒンドゥーもムスリムになることに何の驚きがあろうか？このことが何を意味しようとも、それは理解させる者の手の中にある。もし理解させる者が神に到達した者であり全き者であるならば、もし彼がヒンドゥーであっても、もし知者ならば、彼にとってこの人は、輝かしい心をもつ人 (jyoti dil) なのだ。神は真実であり、真実は全ての場所にあるのだ。人間の種族が真実に至るのにいかなる遅れ (bār) があろうか。[Vajhi 2011: 59]

この箇所では、ワジュヒーはヒンドゥー教の神もムスリムの神も、呼び名の上での差異があるに過ぎず、同じものだ、という主張によって、ヒンドゥー教徒たちを言いくるめるようにして、改宗を促す。しかしヒンドゥー教の中にイスラームに共通する要素を認め、ヒンドゥー教徒に親近感を持たせる仕方では接近していくとき、同時に、布教者自身の内面では、イスラームが変容していく。「もし理解させる者が神に到達した者であり全き者であるならば、もし彼がヒンドゥーであっても、もし知者ならば、彼にとってこの人は、輝かしい心をもつ人 (jyoti dil) なのだ。神は真実であり、真実は全ての場所にあるのだ。」そもそも jyoti “輝かしい” はサンスクリット語で、神格の威力を著す語彙であり、ヒンドゥー教の真理が顕現することを言う表現である。布教者がこのような言説によって異教徒をイスラームに改宗させようと目論むとき、布教者の内面では、逆にイスラームが異教の方へと牽引されざるをえない。

次の箇所では、享楽王クリー・クトップ・シャーとワジュヒーが共通して持っていたであろう享楽主義が謳歌される。この箇所によれば、『全ての味わい (サブ・ラス)』で主人公がそれを追いかけて長い遍歴の旅をする“生命の水”とは、文字通り葡萄酒のことである。この御伽話は“生命の水”を、神との合一や最高真理の象徴とする敬虔な宗教説話であると見せかけて、その実は、飲酒礼賛の物語なのである。

酒は愛される者の美容師 (mashshāṭah) である。それは一つの美を美として見せる。愛を増大させる。愛する者は誰でも、酒がととも似合う。酒は愛する者と愛される者の疑いを遠ざける。酒は両者を愛の中に粉々にする (溶解させる)。酒を飲んだ後は心に反抗がなくなる。酒を飲まないと心がきれいにならない。世の中の味わいとはこの酒のこと。酒がなければ愛する者たちの前に、世の中はまったく悪い。酒は決して嘆きが生じることを許さない。酒は決して嬉しさが心から立ち去るのを許さない。酒は歓楽の集まり。酒がある場所には歓楽がやって来、心の憂いが去ってゆく。心をすっきりとした気持ちに占める。酒を呑めば愛する者たちにとっても益がある。酒がやって来る家に、辛苦がどうして留まることを得ようか？もし悲しみを打ち払うことを求めるなら、酒を呑め！もし君の前から苦難が消え去ることを求めるなら、酒を呑め！もし気前よく大らかな心が欲しいのなら、酒を呑め！もし戦いにおいて馬が立派に走る (= 走らせる) ことを望むなら、酒を呑め！恋人とともに快樂を得たいのなら酒を呑め！もし美を見てみたいのなら酒を呑め！もし心を愛でいっぱいになりたいのなら、酒を呑め！もしいくらか高く登りたい (= 高揚したい) のなら酒を呑め！もし神をつかまえたいのなら酒を呑め！幾人かの聖者たちも飲酒を行ったのだ、この強い水を飲んだのだ。酒は愛の道の乗り物なのだ。酒はこの船着き場の案内人なのだ。酒は皇帝の宴の飾り。酒は神の奥つ城の秘密なのだ。喜びの

真っただ中でどうしてそれ(=酒)を忘れよう? [酒の行う] 仕業は悪くないのにどうして恐れよう? 良いものがあるところには、しかし得てしてそれを禁じてしまうものである。臆病なものたちを「これは悪い意図を抱いている」といって恐れさせる。もしも君の心が清まっているならば、そして君も愛したことがあるならば、愛する者を見て判るはずだ。酒を今、禁忌(ハラーム)であると厳しい人々はいう。けれど、預言者イエスの時代には合法(ハラール)だった。酒に対するこれほどの禁忌。結局、行いについての話なのだ。悪い行いは禁じられているが、酒は違う。知者たちによって無知は禁じられている。が、酒は違う。酒を飲まずして悪い行いをする者はそこで恐れない。[Vajhi 2011: 78]

庇護者クリー・クトゥブ・シャーの死後、禁欲的で厳格な王⁷⁾が跡を継ぎ、詩人ワジュヒは不遇の時を過ごす。上の引用箇所末尾の部分には、気まぐれで賈の禁欲主義を振りかざす為政者に対するワジュヒの本音が垣間見える。

4. まとめ アキール文庫の意義と将来への展望

ダカニー・ウルドゥー語文学は15世紀中頃から17世紀にわたる長い伝統を誇るにも関わらず、従来のウルドゥー語文学史研究からはほとんど無視されていた。アキール・コレクションにはダカニー・ウルドゥー語文学の主だった諸作品およびそれについての研究書が網羅的に揃えられており、これらを用いれば、ウルドゥー語文学の前史を総合的に研究し、今までにない新たなウルドゥー文学史を構築することができるであろう。

これらの文学作品群には、デカン各王朝・各時代の支配者たちおよび宮廷詩人たちの個性が如実に発揮されており、当時の世相・時代の風俗・風潮を知るための情報を豊富に提供している。これらの作品の主人公は、これらの作品が生み出された社会・時代に漲っていた感覚や感性そのものである。ダカニー・ウルドゥーによる文学作品は、ペルシア語の歴史書や行政記録とは性格を異にし、違った視点でデカン史を観るための非常に有益な資料となるだろう。

またダカニー・ウルドゥー文学の発展はイスラームが、もともと非イスラーム地域であった南アジアに伝播する過程と重なっており、かつ、文献が豊富に存在するから、南アジアのイスラーム化の過程を、ペルシア語資料だけでなく、同時期に書かれた現地語による文献に基づいて詳細に研究することができることになる。こうした例は、イスラーム圏を見渡しても特異な例であるといえよう。

また、ダカニー・ウルドゥー文学に見えるムスリム・ヒンドゥー両文化の共存・融合は、今日も世界の重要な課題となっている、異文化の交流・共存のあり方を考えるための非常に有益な材料となるだろう。

参考文献

北田信 2010 「ダキニー・ウルドゥー語の歌詞集成『Kitāb-i Nauras』の言語におけるアラブ・ペルシアの特徴」『東京大学言語学論集』30, pp. 83–92.

松村耕光 2008 「デカンのウルドゥー文学について」『多言語社会における文学の歴史的展開と現在：インド文学を事例として』(課題番号 17202009 平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書 発行者：水野善文(東京外国語大学・外国語学部)), pp. 27–36.

7) ムハンマド・クトゥブ・シャー(クリー・クトゥブ・シャーとは別人)

- Fakhar Dīn Nizāmī. 1973. *Urdū zabān kī pahlī taṣnīf; Maṣnavī-e-Nizāmī Dakanī, al ma'rūf bah Kadam Rāo Padam Rāo*. Murattib: Jamīl Jālibī. Karāčī: Anjuman-e-Taraqī-e-Urdū Pākistān.
- Ḥamīrah Jalīlī (murattibah). 1983. *Sab ras kī tanqīdī tadvīn*. Maqālah.
- Mullā Vajhī. 2011. *Sab Ras*. Murattib: Qamar al-Hudā Farīdī. 'Alīgarh: Ejjukēshanal Buk Hāus.
- Narendra Luther. 1998. *Muhammad Quli Qutub Shah*. New Delhi: Publications Division.
- Osada Toshiki & Masayuki Onishi (ed.). 2010. *Language Atlas of South Asia*. Kyoto (Research Institute for Humanity and Nature).
- Sayyadah Ja'far. 1998. *Kulliyāt-e-Muḥammad Qulī Quṭb Shāh*. Nāī Dihlī: Qaumī Kaunsil barāe Farogh-e Urdū Zabān, (dūsra eḍishan).
- Tabassum Kāshmīrī. 2009. *Urdū adab kī tarīkh. Ibtidā se 1857 īṣvī tak*. Lahore: Sang-e-Meel Publications.